

二〇二六年度 大学院入学試験問題【1期】

文学研究科 日本文学専攻(博士前期課程)

科目 日本語 (辞書使用不可)

【別紙の解答用紙を使用すること】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

(大山康晴『摩訶のこころ』一九七六年、PHP研製所 二五二六頁、より)

注 大山康晴——一九二三—一九九二。将棋の名人。 持時間——将棋の対局時に、両者に与えられる、考慮のための時間。

市電——一九三五年当時走っていた、大阪市の路面電車。 こ苦勞やつたな——苦勞だつたな、の意の大阪方言。

問一 傍線A「勝つて帰つたのに、先生の機嫌が悪い」とあるが、その理由を述べよ。

問二 傍線B「とんと」を言い換えたものとして最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えよ。

- ① すぐには ② はじめは ③ すこしも ④ ゆめにも

問三 傍線C「先生は起きていてくれて」に取われている、木見先生の気持ちを説明せよ。

問四 傍線D「いまのようなやり方」とはどういうやり方が、説明せよ。

問五 傍線E「苦しんで、ほかにもつという手はないかと考える」を「ムダな努力だ」とも言っているが、矛盾にはならないのか、説明せよ。

問六 文学研究あるいは語学研究を行う上でのムダの大切さについて、経験を経まえながら、自由に述べよ。